

閉会の辞

名古屋大学農学国際教育協力研究センター長

山内章

(山内) 昨日午後から2日間にわたって、熱心なご議論を展開していただきましてたいへんありがとうございました。冒頭のご挨拶でも申し上げましたように、今回のオープンフォーラムというのは、少人数で内容の濃い議論をめざしていたところですが、実際にそのとおりになりました。教員と事務方が一堂に会して、非常に中身の濃い議論ができたのではないかと思います。昨日4大学の方から、いろいろな国際協力の事例報告をいただきまして、非常にうまくいったサクセス・ストーリーの中にも、様々な問題点があったというお話をいただきましたけれども、あのように情熱をもって国際協力の場で活躍している先生がいらっしゃる、ということを知って、非常に心が動きましたし、また、農学国際教育協力センター長としても、見習うべき点が多くあることがわかり、今後の活動に活かしていきたいと思っています。

私が申し上げるまでもないのですけれども、大学の中の意志決定というのは、おそらく援助機関の方々には想像がつかないほどやっかいな仕組みになっていまして、トップ・ダウンそれは法人化以降標榜してはおりますけれども、非常に難しいのが現状です。とりわけ名古屋大学は、ボトム・アップによる意志形成という文化をずっとつちかってきたのですけれども、その過程では、意志決定の形が非常に難しいという問題が一方ではあります。したがって、方針が決まって、具体化、実施というところにきましても、今回のテーマでもありました、教員と、事務方との共同作業がいかにかうまくいくか、が成功の鍵ではないか、と私は思いました。

それから、インセンティブに関する議論の中で、我々の仕事が正当に評価されるかどうか、一番重要なインセンティブだというご指摘がありましたけれども、仮に、きちんと評価されるということがなくても、私は多くの教員は、心の中では潜在的に、そういうところでも自分は十分に役に立ちたい、と考えていると思います。しかし、実際に行うのは非常に難しいという側面もあると思います。最も難しい条件は、私個人で言えば、時間がない、これにつきます。本当にやりたいと思っても、時間がなくてできない、と思っている人たちがいる。ここにこそ、専門家集団としての事務部と、教員が、対等な立場で仕事をやっていく意味がある、と思います。もちろん経済的なメリット、報酬、それから評価の仕組みの再構築、ということも非常に重要で現実的なテーマであるので、これらを踏まえた中身づくりを、今後名古屋大学としても早急に取り組んでいきたいと思っています。

具体的には、今松本教授や、本村課長のほうからご発言がございましたけれども、名古屋大学には国際交流協力推進本部が昨年度に発足しておりまして、その中に、国際開発協力部門があります。そこに、国際交流、財務に関わる事務部と教員が構成メンバーとなったワーキンググループを組織して、今回の議論をベースにして具体的な問題点を整理した上で、今後の方針を策定し実施に移していくことを考えています。

準備が足らず、参加者の先生方にはご迷惑をおかけしたと思いますけれども、議論の中身が濃かった分ご容赦いただければ、と思います。昨日から長時間にわたり熱心なご議論をしていただきましてどうもありがとうございました。これにてオープンフォーラムを閉会といたしたいと思います。